

# 他者認知における多元的無知の検討 ：男らしさ・女らしさの勘違い

石 井 徹\*1

Six examples of the pluralistic ignorance in person perception:  
About the common sense of masculinity and femininity

Tooru Ishii

キーワード：常識、男らしさ、女らしさ、多元的無知、社会的現実

Summary: In this study we examined the pluralistic ignorance on the basis of the findings from our research projects. The pluralistic ignorance we concerned with was about the man as it seems and the woman as it seems. The common sense about masculinity and femininity is typically the social reality. In the investigation 4 times we asked subjects about the self image, the man whom they think it seems with the woman it seems, and the man whom (they think) the world thinks it seems, with the woman it seems. The results of the factor analysis of 20 times using these data showed the pluralistic ignorance of 6 examples. We discussed the implication of the pluralistic ignorance in studying the social reality.

Keywords: common sense, man as it seems, woman as it seems, pluralistic ignorance, social reality.

---

\* 島根大学法文学部

\*1 本研究の計画・実施に際して角康代さん，平田早苗さん，藤井茜さん，山本麻央さん（いずれも22年3月卒業）の協力を得た。ここに記して謝意を表します。

社会的現実 (social reality) という用語を用いてはいないものの、Garfinkel(1963)は、構成期待を基礎として我々が周囲の社会を形成し、維持しようとしていることを指摘する。その社会は家族らしさ、ご近所らしさ、お店らしさ、さらには人間らしさや恋人らしさ等々、「らしさ」に満ちた社会である(石井, 1996, 2005, 2007)。「らしさ」は「らしくない」ものごとに出会ったとき、逆説的に実感できる。かつて木で作られていた「机」という物体は、現在、金属と合成樹脂の混合物になり、「机」がまさしく机らしい形や機能を一言で表した約束事すなわち一つの社会的現実であることを示している。これらの様々な「らしさ」の中で客観的実在を伴うものはわずかであり、その場合でも、例えば「血縁」のように、手頃な物理的実在に割り当てた「社会的現実」によって我々の周囲に存在している。すなわち我々は、漬け物石や机から家族・友人、国家・文化にいたるまで、様々な社会的現実の中で日々生活している。

本稿で社会的現実を問題とするのは、第1に、これが日々我々の生活を支える一方で同時に拘束もしているからである。必要なものはともかく不必要な拘束は取り除かれなければならない。Prentice & Miller(1993, 1996)がプリンストン大学での一連の調査を通じて見出した飲酒に対する多元的無知(pluralistic ignorance)がその好例となる。「私はともかく、他のみんなは酒を飲むと心地よくなる」とみんなが思っていた。調査結果に即して言えば、みんなではなく大多数であるが、それでも事情は変わらない。そもそも我々の周界を構成する社会的現実、大多数の総意という形で存在する。

多元的無知は既存の社会的現実が、その根拠となる物理的客観的実在がないだけではな

く、我々の合意の上でも客観的根拠の無いことが明らかになった例である。社会的現実とは元来人々の合意に基づいたものであるが、中にはその内容と現実がかけ離れてしまうこともある。しかしその食い違いはある日いきなり生じるわけではない。合意の産物であるが故に、時間とともに様々な事情や原因で少しずつ食い違ってくることは充分想定される。物理的な生活様式の変化は有力な起因の一つであろう。現在においてもその変化にともなう、我々の周りで「お店」や「買い物」、「家族」といった社会的現実が変わりつつあるように見える。例えば「うちはともかく、『家族』といえばサザエさんの光景だと誰もが思っている」とみんなが思う社会になりつつあるように見える。このことは「昭和の家族」を強調する映画やドラマあるいはマスコミの動向からもうかがえる。すなわち、まだ存在する社会的現実を「良き習慣」として改めて合意し直し、変わりつつある実質を押しとどめ、合意と内容の両者を従来のまま維持しようとする対抗的な動きと見ることができる。

しかしそれでも我々の周界は変わる。Best(2006)に従えば、進歩の経験、完全を目指す姿勢、合理性の信仰などが、経済や政治、科学、教育を通して我々に変化を迫る。同時にまた我々自身も加齢にともなう様々な変化に否応なくさらされている。

すなわち変わりつつある現実を前提として、既存の社会的現実に対して新しい社会的現実が合意あるいは形成されてゆく過程を探索、検討するのが本稿の第2の目的である。そこでは、上に述べたような現在を維持しようとする過程も、変化に対する負の過程と位置づけ、理解することができる。本稿では社会的認知における一つの研究としてその過程の一断面を解析する。

社会的現実の中でも特に日常的な対人関係における「らしさ」については、物理的实在に乏しく客観的普遍性も相対的に低いものが多い故に、逆説的に社会的現実の好例となる。本稿ではその代表として男らしさと女らしさを取り上げる。

対人認知において客観的普遍性の最も低い対象は自己である。自己像については文字通り十人十色とすることができる。それでも日常においてなにがしかの共通性が期待できるのは、我々が同じ社会に暮らし、自己像を含めて様々なものの見方を同じように学習してきたからである。

自己像とは反対に、客観的普遍性が高いものの一つが「男らしさ・女らしさ」に対するいわゆる常識あるいはステレオタイプと呼ばれるものである。文字通り男らしい男、女らしい女のモデル像を多くの人々が共有し、その影響を受けている。

そして各自が考える「男らしさ・女らしさ」はこの中間に位置づけることができよう。それは一方で自己像の延長として存在し、他方で常識的な「男らしさ・女らしさ」の影響を受けている。

この時影響を受ける対象は、個々の像の具体的な内容もさることながら、それぞれの像を思い描くときの視点であることが期待できる。あこがれの男性像あるいは女性像の姿形そのものの模倣は困難でも、表情や仕草、話し方などの模倣は容易にできる。その一部は立ち居振る舞いとして「身に付く」こともある。すなわち、自己像においてもわずかでさえ期待できる個人間の共通性、そして自己像と2種の「男らしさ・女らしさ」にも期待できる共通性は、個々の像の具体的な内容よりも、むしろそれを見る視点に求められる。

経験的には周知のごとく、この視点は時代

とともに明らかに変化してきた。昨今の「草食系男子」(牛窪, 2008)を持ち出すまでもなく、学究的にもこれまでその諸相が明らかにされることは多々あった。しかし、特に自己像との関係において2種の「男らしさ・女らしさ」との相互影響過程を実証的に検討する研究はこれまでなかったと思われる。様々な社会的現実の生成と維持および変容の過程を探る上で、個人と周囲の世界(以下周界と略記)とのこのような相互影響過程は中心となるものであり、本研究では「男らしさ・女らしさ」を例としてその一端を探る。

## 方 法

**概 要** 「性別に対する社会通念の調査」との名目で、自身が思う自分の像(以下、自己像)、自身が思う男らしさ・女らしさ(以下、自身の男らしさ像、自身の女らしさ像)および世間が思う(と思う)男らしさ・女らしさ(以下、世間の男らしさ像、世間の女らしさ像)の3種類について調査を行った。質問は性格特性と行動特徴の2つの側面について行った。調査は自己像と自身の男らしさ・女らしさの2つを同時に行った。その順序は自己像をまず問うた後、自身の男らしさ・女らしさを問うた。2つの側面を2週連続して性格特性、行動特徴の順に調査した。その後ほぼ2ヶ月の間隔を置いて世間の男らしさ・女らしさに対する調査を同じく2週連続して行動特徴、性格特性の順に行った。

**質問項目** 性格特性については福富(1985)の男性度・女性度テストをもとに、予備調査の結果に基づき、想定される調査対象者にふさわしい修正を加え、62項目を作成した。同じく行動特徴については小出(1999)のジェンダー・パーソナリティ・スケールをもとに48項目を並び替えた(表1参照)。ともに項目

表 1. 質問項目一覧

性格特性項目リスト

- 例. 空腹である
1. 自信がある
  2. 従順である
  3. 人の役に立つ
  4. 自分の考えを主張する
  5. ほがらかである
  6. 気がかわりやすい
  7. 人に頼らない
  8. 内気である
  9. 良心的である
  10. 運動が得意である
  11. やさしい
  12. わざとらしい
  13. 自己主張が強い
  14. おだてられるとうれしい
  15. きげんがよい
  16. 個性が強い
  17. 貞節である
  18. おちつきがない
  19. 押しが強い
  20. 女性的である
  21. 人に頼られる
  22. 分析的に考える
  23. 共感しやすい
  24. 人をうらやましく思いやすい
  25. リーダーの能力がある
  26. 他人の求めているものがすぐわかる
  27. 誠意がある
  28. 危険を冒す
  29. ものわかりがよい
  30. 秘密主義である
  31. 決断が早い
  32. 同情心が厚い
  33. 真心がある
  34. 自分で何でもできる
  35. 傷ついた人の心を慰めてやりたい
  36. うぬぼれている
  37. 人に指図をする
  38. ことば使いがやさしい
  39. 人から好かれる
  40. 男性的である
  41. あたたかい
  42. まじめくさっている
  43. 自分の立場を明確に打ち出す
  44. 人やものをいつくしむ
  45. 友だちになりやすい
  46. 積極性がある
  47. 信じやすい
  48. ぐずぐずしている
  49. リーダーとしてふるまう
  50. 無邪気である
  51. 適応性がある
  52. 個人主義的である
  53. 激しいことば使いを避ける
  54. 手際が悪い
  55. 人と競争する
  56. 子どもが好きである
  57. 手抜かりがない
  58. 大志を抱く
  59. 情がこまやかである
  60. 考え方が古い
  61. 気が利く
  62. 愛想が良い

行動特徴項目リスト

- 例. 道に迷いやすい
1. 育児にむいているような気がする
  2. 人と話すときは激しい言葉遣いを避ける
  3. 結婚するとしたら相手だけで幸せになれるか決まる
  4. ヘアバンドや髪止め用の髪飾りをつける時がよくある
  5. 人の表情から気持ちを敏感に感じとる

(表1の続き)

6. 状況判断を正確に行ない臨機応変に物事に対処できる
7. 泣いてしまうことがよくある
8. アイロンをかけている姿が絵になる
9. 普段、取るに足らないことでも友達としゃべりがちだ
10. 車などの所有物によって自分の魅力をアピールする
11. 将来、仕事中心で家事を怠ってしまうような気がする
12. 度胸のある気の強い人間であらねばならない気がする
13. 見知らぬ異性から体をジロジロ見られる時がよくある
14. ピンク色の服でも抵抗なく着れる
15. 組織の中で、目下の者をうまく取りまとめていける
16. マニキュアを塗ったほうが魅力が高まると思う
17. デートでは、リード役であらねばならない気がする
18. 占いに興味を持っている
19. 自分の考えを主張することができる
20. 一本筋を通し、しっかりしなければならぬ気がする
21. 受験勉強では実力以上の学校を狙って頑張ってきた
22. 恋愛には、性行為よりロマンチックな雰囲気憧れる
23. 物事を考える時、論理より感性を働かせがちである
24. 将来、何かと過剰な責任がのしかかり荷が重いと思う
25. 同年代男女の平均よりも多くの年収を稼ぐ確率が高い
26. 野心や野望を持っていないかならない気がする
27. むだ毛（ひげを除く）の処理に気を使う時がよくある
28. 入念に化粧をする時がよくある
29. 髪を長く伸ばしたほうが異性からのウケがいいと思う
30. 香水をつける時がよくある
31. ボディーラインが強調された服を着る時がよくある
32. ファッションに、スカーフを使うと魅力が高まると思う
33. 結婚するとしたら相手の方からプロポーズしてほしい
34. 自分でなんでもできる
35. 人に依存したり甘えることが、許されない気がする
36. 人やものをいつくしむ
37. 普段、洋服や髪型など身だしなみに気を配っている
38. イヤリング（ピアスを除く）をつける時がよくある
39. 自分の考えを主張する
40. 定年まで中断せず収入のある仕事を続ける確率が高い
41. 駅のホームなどの鏡で自分の顔をよく見がちである
42. 包容力があって、頼もしくあらねばならない気がする
43. 筋肉が目立つような、たくましい体形でありたい
44. 将来、あくせく働かずラクに暮らしていけると思う
45. 華やかな色や模様（がら）の服を着る時がよくある
46. 恋人には、できれば自分より背の高い人を選びたい
47. スリムな体形でありたい
48. 可愛らしくもありたい

表2. 「男らしさ・女らしさ」に関する自身と世間像の異同

自己像		自身の像		世間の像	
<b>性格特性</b>		<b>男らしさ 性格特性</b>			
男性	1 社会的望ましさ 2 リーダー 3 社交性 222名	男性	1 理想のリーダー 2 思いやり 3 <b>ダメな男</b> 222名	1 リーダー 2 思いやり 3 <b>自己主張</b> 127名	
女性	1 社会的望ましさ 2 リーダー 3 やさしさ 120名	女性	1 思いやり 2 リーダー 3 誠実さ 120名	1 リーダー 2 思いやり 3 <b>ダメな男</b> 73名	
<b>行動特徴</b>		<b>男らしさ 行動特徴</b>			
男性	1 心身の強さ 2 頼もしさ 3 おしゃれ 184名	男性	1 頼もしさ 2 <b>家庭的</b> 3 <b>おしゃれ</b> 184名	1 頼もしさ 2 おしゃれ 3 家庭的 124名	
女性	1 日々のおしゃれ 2 頼もしさ 3 自己主張 106名	女性	1 頼もしさ 2 <b>しっかり</b> 3 家庭的 106名	1 頼もしさ 2 <b>甲斐性</b> 3 家庭的 87名	

ごとに全くあてはまらない(1)からほぼあてはまる(6)までの6件法(リッカート・スケール)によって回答を求めた(カッコ内の数値は転記時のもの)。これらの項目を用いて自己像と自身の男らしさ像、自身の女らしさ像、および世間の男らしさ像、世間の女らしさ像を問うた。

**手続き** 調査はすべて筆者の講義中にその一環として匿名で行った。2009年4月21日に自己像と自身の男らしさ像・女らしさ像について性格特性項目による調査を行った(有効回答数421名)。同じく4月28日に自己像と自身の男らしさ像・女らしさ像について行動特徴項目による調査を行った(有効回答数342名)。2ヶ月後の6月23日に世間の男らしさ像・女らしさ像について行動特徴項目による調査を行った(有効回答数238名)。さらに6月30日に世間の男らしさ像・女らしさ像について性格特性項目による調査を行った(有効回答数248名)。

実施に際してはまず自己像について問うた後、自身の思う男らしさ像・女らしさ像につ

いて問うた。ほぼ2ヶ月後、世間の思う男らしさ像・女らしさ像については女らしさ、男らしさの順に問うた。どの場合も最後に調査対象者の性と年齢を問うた。所要時間は配布と回収の時間を除いて15分から25分であった。

### 結果と考察

以下に報告する結果は都合20回の因子分析の結果である。20回とは、自己像、自身の男らしさ像、自身の女らしさ像、および世間の男らしさ像、世間の女らしさ像の5つそれぞれに対して性格特性と行動特徴ごとに、加えて男女別に因子分析を行った回数である。以下に述べるように20回のうち4回の因子分析では第2因子の説明率が10%未満であったが、残るすべての分析では第2因子の説明率は10%を上回り、第3因子で10%未満となるパターンを示した(表2参照)。表2はこれら20回の因子分析結果をまとめたものである。個々の分析結果に対する詳細な因子負荷量の

## (因子構造一覧)

	自身の像	世間の像
<b>女らしさ 性格特性</b>		
男性	1 理想の女性	1 理想の女性
	2 自己主張	2 リーダー
	3 リーダー	3 自己主張
	222名	127名
女性	1 理想の女性	1 理想の女性
	2 ダメな女	2 リーダー
	3 リーダー	3 ダメな女
	120名	73名
<b>女らしさ 行動特徴</b>		
男性	1 お嬢様(*)	1 お嬢様(*)
	2 自己主張	2 自己主張
	3 かわいい体形	3 かわいい体形
	184名	124名
女性	1 おしゃれ	1 古風な女性
	2 自己点検	2 華やかな女性
	3 かわいい体形	3 かわいい体形
	106名	87名
(*)おしゃれ+仕草		

一覧表は、要請に応じて公開する用意がある。本稿では煩雑になるのをふせぐため表2に基づいて解説する。また分析には有効回答のうち、記入漏れがまったくないものを使用した。

**分析手順** 因子分析はすべて主因子法により、初期解に対してバリマックス回転を行った。どの像に対しても共通性の出現パターンが安定するまで、共通性の低い項目を除きながら3度から5度、分析を繰り返した。表2には16回の分析については説明率が初めて10%未満となった因子までを載せた。残る4回は第2因子ですでに10%未満になったが、他とそろえるために第3因子までを載せた。説明率は主因子分析時の値を用いた。

**自己像について**

性格特性項目による男性(222名)の自己像の因子構造 第1因子はやさしい、良心的、あたたかい、真心、誠意などに高い負荷量を示しており、社会的な望ましき因子と読みとった。同じく第2因子はリーダーとしてふるまう、リーダーの能力がある等の項目から

リーダー因子、第3因子は友達になりやすい、愛想が良いなどから社交性因子と読みとった。

性格特性項目による女性(120名)の自己像の因子構造 第1因子は誠意がある、真心があるなどから社会的な望ましき因子と読みとった。第2因子はリーダーの能力がある、リーダーとして振る舞う、頼られる等の項目からリーダー因子、第3因子はやさしい、良心的等の項目からやさしさ因子と読みとった。

男性の第1因子が、女性では第1因子と第3因子に分かれていることが読みとれる。また第2因子のリーダーについても、自己主張する姿を考える男性と、頼られ、役に立つ存在として考える女性に若干の違いが認められる。

説明率から見ると、「社会的望ましき」ほぼ一辺倒(説明率24.41%)の男性の自己像は、「社会的望ましき(説明率32.72%)」と「リーダー性(同13.27%)」の二次元的広がりを示す女性の自己像に比べて単純に見える。加えて、説明率10%以上の因子に対する累積説明率の違い(男性、24.41%;女性、45.99%)は、男性の方が自己像が曖昧あるいは多岐であることをうかがわせる。

行動特徴項目による男性(184名)の自己像の因子構造 第1因子は包容力があってたくましい、度胸があり気の強い人間筋を通してしっかりしている等の項目に高い因子負荷量を示したことから、心身の強さ因子と読みとった。第2因子は自分の考えを主張できる、目下をまとめられる等から頼もしさ因子、第3因子はマニキュアで魅力が高まる、スカートで魅力が高まる等からおしゃれ因子と読みとった。

行動特徴項目による女性(106名)の自己像

の因子構造 第1因子は長い髪が異性にうける、鏡で自分の顔をよく見る、所有物で魅力をアピール等から、日々のおしゃれ因子と読みとった。第2因子は判断が正確で臨機応変、目下をとりまとめられる等から、頼もしさ因子、第3因子は自分の考えを主張する、できるから自己主張因子と読みとった。

明らかに男性では第2因子として一まとめになっていたものが女性では第2因子と第3因子に分離している。リーダーに対して男性がグループをまとめると同時にリーダーとしての自己主張も含めた姿を想定している一方で、女性の考えるリーダーはグループをまとめるのが主たる姿で自己主張は別の要素としてとらえられており、男女の食い違いが見える。また説明率が最も高い第1因子の違いは、行動特徴で表現する場合、男性と女性の自己像が全く共通性を持たない別種のものであることを示している。

### 性格特性による描写と行動特徴による描写の違い

性格特性による自己像の描写と行動特徴による描写を比べると、上に述べたように、相対的に前者の性格特性による描写の方が男女の共通性は高かった。男女ともに性格特性では「社会的望ましさ」を主軸として自己を判断していた。ただし女性の考える「社会的望ましさ」には男性のように「やさしさ」は含まれておらず、若干の違いを示した。また主に2つの視点から自己像を考える女性に対して、「社会的望ましさ」に依拠しつつも、それ以外の何かとの組み合わせによる、男性の多様な視点がうかがえた。

行動特徴による自己像の描写では、男女の共通性は次の二点において低いものとなった。第1因子は明らかに男女別のものであった。第2因子は男女とも頼もしさ因子であった

が、性格特性による描写の場合と同様に、思い浮かべる頼もしさに男女の違いが見られた。

十人十色が本来である自己像に対して男女別にその異同を探ったのは、次に考える他者認知の基礎を確認するのが目的であった。以上の結果を踏まえて次に自身の男らしさ像・女らしさ像に対する結果を検討する。

### 自身の男らしさ像・女らしさ像：各自が思う「男らしさ・女らしさ」

#### 性格特性による描写

#### 各自が思う「男らしさ」について

男性が思う「男らしさ」 分析結果より第1因子は、リーダーの能力や行動、押しが強い、決断が早い、運動が得意、大志を抱く等の項目に高い負荷量を示したことから、理想のリーダー因子と名付けることができよう。高い因子負荷量を示す先の項目群は、自己主張や頼られるという項目とあわせて、小説やドラマに出てくる理想のリーダー像そのままである。また第2因子は子供が好き、愛想がよい、真心、情が細やか、共感しやすい、傷心を慰める、気が利く、などの高い負荷量を示す7項目の内容から思いやり因子と考えることができる。同様に第3因子はダメな男因子ととらえることができる。この因子に高い負荷量を示した「気が変わりやすい」、「わざとらしい」、「おだてられるとうれしい」、「落ち着きがない」、そして「うぬぼれている」という五つの内容は、男性固有の性格特性ではなく、まして女性固有のものでもないが、俗に言われる「ダメな男」の典型ではある。説明率が低いもののこの第3因子は、後に女性が考える「女らしさ」の項で述べる「ダメな女」因子と、各自が考える「男らしさ・女らしさ」の社会性を示す部分として興味深い対をなしている。



女性が思う「男らしさ」 分析結果より第1因子は、適応性がある、友達になりやすい、好かれる、子供が好き、他人の求めがわかるなど、思いやり因子と名付けることができよう。男性の第2因子を含んで、思いやりの内容をより詳細に描く視点がうかがえる。逆に第2因子は、リーダーの行動や能力、頼られる、大志を抱く、積極性があるなどから、リーダー因子と呼ぶことができよう。しかし男性が第1因子として描く理想のリーダーほどの詳しさ、明確さは認められない。男性が考えるほどの理想像がうかがえないことから、より現実的な意味合いも含めてしっかりリーダーの因子と考えておきたい。第3因子は男性の場合と同じく、誠意、真心、あたたかい、いつくしむ、やさしい、良心的、など説明率が低いものの誠実さ因子と考えることができる。

第1因子と第2因子に限ってみれば、同じ「男らしさ」について男性と女性では、見方について優先順位の逆転が見られたと云う。思い描くリーダー像にも若干の食い違いがうかがえる。

#### 各自が思う「女らしさ」について

男性が思う「女らしさ」 男性が考える「女らしさ」の第1因子は理想の女性因子とでも名付けざるを得ないほど、多くの性格特性を含んでいた。分析に残った27項目のうち因子負荷量が0.5以上のものだけでも19項目にのぼる内容を上の表現以外に一言で表現するのは難しい。負荷量が0.7以上のものをあげると、良心的、やさしい、誠意がある、同情心がある、真心がある、傷心を慰める、好かれる、あたたかい、いつくしむ、子供が好きの10項目になった。ここに見えるとおりの内容は男性が考える「男らしさ」の場合と同じく、小説やドラマに出てくる理想的な女性

像である。男性との対比で表現するならば、理想の女性因子と名付けられる。すなわち男性は自身の思い描く「男らしさ・女らしさ」にそれぞれの理想像をまず見ているといえる。第2因子は考えを主張、自己主張、個性が強い、立場を打ち出すなど自己主張因子、第3因子は押しが強い、リーダーの能力と行動、大志を抱くなどリーダー因子と考えられ、二つを合わせると「男らしさ」の項で見られたリーダー因子になると思われる。

女性が思う「女らしさ」 女性が考える「女らしさ」の第1因子は、男性の場合と同様、良心的、真心、やさしい、あたたかい、いつくしむなど、理想の女性因子と考えられる。分析に残った25項目の中で因子負荷量が0.5以上のものは16項目であり、さらにその中の14項目が男性の第1因子と同じであった。さらに第2因子も「男らしさ」の場合と同じく、おだてられるとうれしい、人をうらやむ、信じやすい、ぐずぐずしているなど、ダメな女因子と名付けることができる。ここに高い負荷量を持つ性格特性は、時に女性特有のものと称されるが、経験的には男女関係なく見られる内容である。また第3因子は積極性がある、リーダーの行動と能力、考えを主張など、男性同様リーダー因子と考えられる。

「女らしさ」に対する第1因子は男性と女性において同じものと見なす。「女らしさ」について男性も女性もまずは同じ見方をしている。しかし第2因子は別であった。男性が自己主張する女性像を探そうとするのに対して、女性はダメな女像を二の次に考える。

以上をまとめると「男らしさ」に対して男性は理想のリーダー因子、思いやり因子の順にその像を描いていた。これとは逆に女性は「男らしさ」を思いやり因子、リーダー因子の順で描いていた。女性の考えるリーダー因

子は男性の考える理想のリーダー因子の一部であった。「男らしさ」に関して男性と女性の視点は優先順位が逆転しているものの、この二つの視点そのものはほぼ同質と思われる。

「女らしさ」に対しては男性も女性もともに第1因子として理想の女性因子を示した。「女らしさ」に対する第2因子として男性は自己主張因子を示したが、女性はダメな女因子を示した。同様の因子は男性の考える「男らしさ」の第3因子にもダメな男因子（説明率6.05%）として見出されたが、女性が示したダメな女因子は第2因子としてほぼ15%の高い説明率を示した。

また男性は「男らしさ」に対して理想のリーダー因子を、「女らしさ」に対して理想の女性因子を第1因子として示した。女性は「男らしさ」には思いやり因子を、「女らしさ」には理想の女性因子を第1因子として示し、「男らしさ」に対する男女の認識の違いが明らかになった。男性は「男らしさ」にも「女らしさ」にも理想をまず見るが、女性は「男らしさ」に理想は見えていない。さらに男女の認識の違いはダメな男因子を第3因子として示した男性と、ダメな女因子を第2因子として示した女性にも見られた。重視する視点の順位の違いは第1因子に対する理想の見方と考え合わせると、理想を見がちでダメな面を後回しにする男性と、同性について理想を見ながらもなお「男らしさ・女らしさ」をより現実的にとらえる女性という違いも見える。

自己像との異同については、社会的望ましさの視点が大きなウェイトを占めた自己像が現実に即した視点であったのに対して、自身が思い描く「男らしさ・女らしさ」の判断では理想像が大きなウェイトを占めたことがまずあげられよう。他方同じであったのは、リー

ダーとしての視点がウェイトの軽重の差こそあれ、必ず見られたことである。自己像では男女とも2番目に、「男らしさ」では1番目(男性)と2番目(女性)に、「女らしさ」でも男女とも3番目に入っていた。自己であれ男性(女性)であれ、対象をどの程度リーダーであるかという視点で見ると、少なくとも現在の若者の対人認知における一つの特徴と言えよう。

### 行動特徴による描写

#### 各自が思う「男らしさ」について

男性が思う「男らしさ」 分析結果より男性が行動特徴によって思い描く「男らしさ」の第1因子は、自分の考えをしっかりと主張できる、筋を通してしっかりしなければ、目下をとりまとめられるなどの項目に高い因子負荷量を示したことから、頼もしい男性因子と読みとった。第2因子は同じく、育児に向いているアイロンがけが絵になる、よく泣いてしまうなどから、家庭的因子と判断した。第3因子は、香水をよくつける、スカーフで魅力、長い髪が異性にうけるなどからおしゃれ因子と読みとった。自己像の見方との関連においては、しっかりしたリーダー因子は行動特徴によって思い描く自己像の第1因子と第2因子を合わせたものと言いうる。またおしゃれ因子はともに第3因子として共通しているものの家庭的因子は自己像にはなかった見方(因子)である。

女性が思う「男らしさ」 同じく分析結果より女性が行動特徴によって思い描く「男らしさ」の第1因子は、デートではリードする、目下をとりまとめられる、判断が正確で臨機応変、定年まで仕事を続ける、たくましい体形などから頼もしい男性因子と判断した。第2因子は、筋を通してしっかりしなければ、将来過剰な責任で荷が重い、甘えられないな

どからしっかり因子と判断した。第3因子は育児に向いている、激しい言葉遣いを避ける、人や物をいつくしむ、表情から気持ちを読むなどの項目から家庭的因子と読みとった。自己像の場合と同じく、男性が思い描くしっかりしたリーダー因子は、女性では第1因子と第2因子に分かれていた。そのため家庭的因子は、女性の中では3番目になった。また男性が思い描いた「男らしさ」の第3因子、おしゃれ因子は女性の思い描く像の中で主たる位置にはなかった。

行動特徴で描く「男らしさ」について男性も女性も基本的には同じ見方をしているが、リーダー像に違いが見られる。また女性の考える「男らしさ」におしゃれは重要ではなかった。

#### 各自が思う「女らしさ」について

男性が思う「女らしさ」 男性が行動特徴によって思い描く「女らしさ」の第1因子は、つまらないこともおしゃべり、占いに興味、入念に化粧する、ボディラインの服、香水をよくつけるなどから、お嬢様因子と判断した。第2因子は自分の考えを主張する、度胸があつて気の強い人間など自己主張因子、第3因子は可愛らしくありたい、スリムな体形、たくましい体形（負の負荷量）などからかわいい体形因子と読みとった。つまり男性が思い描く「女らしさ」の中心は、心身の美しさと自己主張に関するものだった。また第1因子のお嬢様因子は、次に述べる女性が思い描く「女らしさ」との関係ではおしゃれ因子と女らしい仕草因子を合わせ持った視点になっている。

女性が思う「女らしさ」 女性が行動特徴によって思い描く「女らしさ」の第1因子は、長い髪が女性にうける、スカーフで魅力、髪飾りをよくつける、マニキュアで魅力などか

らおしゃれ因子と判断した。第2因子は、鏡で自分の顔をよく見る、むだ毛の処理、入念に化粧などから自己点検因子と判断した。同様に第3因子は人や物をいつくしむ、可愛らしくありたい、スリムな体形から、かわいい体形因子と読みとった。男性が思い描く「女らしさ」以上に心身の美しさに終始している。

行動特徴で描く「男らしさ」については男性も女性もリーダー性と表現できる基本的に同じ見方をしていた。しかしそのリーダー像には若干の違いが見られた。男性の考えるリーダーがしっかりとしたリーダー像だったのに対して、女性が考えるリーダー像はリーダー性としっかりしている様子を別の側面として持っていた。また女性の考える「男らしさ」におしゃれは重要ではなかった。

同じく行動特徴で描く「女らしさ」については男性も女性も心身の美しさの視点から思い描いていた。男性に自己主張因子が見出された他は、すべて心身の美しさに関する視点だった。

以上を男性と女性の異同の観点から要約すると、「男らしさ・女らしさ」について行動特徴で思い描くとき、男性も女性も基本的に同じ見方をしていた。すなわち「男らしさ」についてはリーダー因子と家庭的因子、「女らしさ」については心身の美しさが男女とも基本的な見方となっていた。ただし男性は「男らしさ」についてはおしゃれ因子を、「女らしさ」については自己主張因子を加味してそれぞれを見ていた。また逆に、女性はリーダー性と家庭的である程度、心身の美しさを細分化する視点で「男らしさ」や「女らしさ」を思い描いているのに対して、それらにおしゃれ性、自己主張性を付け加える視点で「男らしさ」や「女らしさ」を思い描いている男性、という違いにも見えた。

**性格特性による描写との異同** 「男らしさ」については、リーダー因子が第2因子までのところ共通してみられた。これは、性格特性についても行動特徴についても、また男性についても女性についてもほぼ同じであった。

「女らしさ」については、内面重視の理想の女性像は性格特性による描写では、男女ともに第1因子だったが、行動特徴による描写ではかわいい体形因子として第3因子でうかがわれるのみであった。行動特徴で思い描く「女らしさ」では当然のこととはいえ、おしゃれという外面の美しさが男女ともに第1因子だった。女性の思い描く「女らしさ」はおしゃれな慈母と要約できる。他方男性は「女らしさ」について、第1因子では女性とほぼ同じ視点であったが、第2因子では女性と異なり、性格特性でも行動特徴でもともに自己主張因子を示した。行動特徴による描写ではダメな男、ダメな女という視点は示されなかった。

#### **世間が思う（と思う）男らしさ・女らしさ：世間の男らしさ像、世間の女らしさ像**

次に、世間が思うと思う「男らしさ・女らしさ」について、性格特性と行動特徴からその像の構造を探る。またその特徴を、主に自身が思い描く「男らしさ・女らしさ」と比較する。分析は、性格特性については回答漏れが皆無だった男性127名、女性73名、行動特徴については同じく男性124名、女性87名の結果を用いた。

#### **性格特性による描写**

##### **世間が思う「男らしさ」：男性の回答**

男性が思い描く「世間が考える男らしさ」の第1因子は、リーダーの能力、頼られる、積極性がある、押しが強い、決断が早い、リーダーの行動などの項目に高い負荷量を示すことから、リーダー因子と読みとった。同じく第2因子は、いつくしむ、友だちになりやす

い、他人の求めがわかるなどから思いやり因子、第3因子は、考えを主張、自信がある、内気である（負の負荷量）、自己主張などから自己主張因子と読みとった。この構造は、男性自身が思い描く「男らしさ」とほぼ同じと判断できる。性格特性で描かれる第1因子と第2因子は男性の場合ほぼ同じであり、第3因子のみ、自身が思い描く「男らしさ」ではダメな男因子、「世間が描く男らしさ」では自己主張因子と異なっていた。

##### **世間が思う「男らしさ」：女性の回答**

女性が思い描く「世間が考える男らしさ」の第1因子は、リーダーの行動、積極性がある、決断が早い、リーダーの能力、頼られる、内気である（負の負荷量）などから、やはり、リーダー因子と読みとった。また第2因子はやはり同じく、いつくしむ、言葉遣いがやさしい、激しい言葉を避ける、情が細やかなどから思いやり因子と判断した。この2因子は男性と同じだった。そして第3因子は、ぐずぐずしている、落ち着きがない、わざとらしい、うぬぼれている、人をうらやむ、信じやすいなどからダメな男因子と読みとった。わざとらしい、落ち着きがない、うぬぼれているの3項目は男性の自身が思い描く「男らしさ」の第3因子にも見られたものであり、残りの人をうらやむ、信じやすい、ぐずぐずしているという内容が、女性の思い描く「世間のダメな男像」の特徴と言いうる。女性自身が思い描く「男らしさ」との異同については、第1因子と第2因子の順位が逆であり、第3因子が自身の思い描く像では誠実さ、世間が描くと考える像ではダメな男だった。

##### **世間が思う「女らしさ」：男性の回答**

男性が考える「世間が考える女らしさ」の第1因子はやはり理想の女性因子と名付けざるを得ない。負荷量が0.7以上のもの例として

あげると、良心的、やさしい、真心がある、言葉遣いがやさしい、好かれる、あたたかい、いつくしむ、子供が好き、情が細やか、気が利く、愛想が良いの11項目になった。自身が考える「女らしさ」とは、項目23（共感しやすい）と項目26（他人の求めがわかる）が異なっており、自身の像では含まれていた項目50（無邪気）が世間の像では含まれていないことを除いて、他はすべて同じであった。第2因子は、リーダーの能力、リーダーの行動、自分で何でもできる、積極性がある、大志を抱くなど、これまでの諸項でリーダー因子と読みとってきた内容であり、自身の像では第3因子になっていた。これとは逆に第3因子は、個性が強い、自己主張、考えを主張、人に指図をするなど、これも明らかに自己主張因子であり、自身の像では第2因子だったものがより軽い順位になった。

#### 世間が思う「女らしさ」：女性の回答

女性が考える「世間が考える女らしさ」の第1因子は、男性と同じく、そして自身の像と同じく、やはり理想の女性因子であった。自身が考える「女らしさ」とは、17項目中12項目が共通している。第2因子もやはりこれまでの諸項でリーダー因子と読みとってきた内容であり、自身の像では男性と同じく第3因子になっていた。これとは逆に第3因子はこれも明らかにダメな女因子であり、自身の像では第2因子だったものがより軽い順位になった。

#### 行動特徴による描写

##### 世間が思う「男らしさ」：男性の回答

行動特徴によって男性が思い描く「世間が考える男らしさ」の第1因子は、自分の考えを主張できる、包容力があって頼もしい、たくましい体形、筋を通してしっかり、度胸があり気の強い人間であるべき、目下をとりま

とめられる、判断が正確で臨機応変にできるなどの項目から、頼もしい男性因子と判断した。同じく第2因子は、むだ毛の処理、香水をよくつける、入念に化粧する、身だしなみに気を配るなどから、おしゃれ因子と読みとった。第3因子は育児に向いている、激しい言葉遣いを避けるなどから家庭的因子と判断した。自身が考える「男らしさ」に比べて、おしゃれ因子の説明率が高く第2因子となった。

##### 世間が思う「男らしさ」：女性の回答

女性が行動特徴によって思い描く「世間が考える男らしさ」の第1因子は、自分の考えを主張できる、包容力があって頼もしい、筋を通してしっかり、目下をとりまとめられる、デートではリードするなどの項目から、頼もしい男性因子と読みとれる。第2因子はこの分析の中で初めて見られる内容であり、度胸があり気の強い人間であるべき、受験では実力以上を標的にした、同い年よりも多くを稼ぐ、定年まで仕事を続けるなどから、甲斐性因子と呼ぶことにした。また第3因子は育児に向いている、激しい言葉遣いを避ける、依存したり甘えたりできない（逆転項目）などから家庭的因子と読みとった。

自身が考える「男らしさ」との比較では、第1因子は自身が考える「男らしさ」の場合よりも男性の視点に近い。第3因子は自身の考える「男らしさ」と同じである。しかし説明率が高く第2因子となった甲斐性因子は、女性が行動特徴によって思い描く「世間が考える男らしさ」で初めて見出された。これは自身が思い描く「男らしさ」で見られた第2因子のしっかり因子と比べても、上述のように内容はまったく異なっていた。

##### 世間が思う「女らしさ」：男性の回答

男性が行動特徴によって思い描く「世間が

考える女らしさ」の第1因子は、マニキュアで魅力、占いに興味、入念に化粧する、香水をよくつける、ボディラインの服、イヤリングをよくつける華やかな色や模様の服などから、お嬢様因子と判断した。第2因子は自分の考えを主張する、度胸があつて気の強い人間、目下をとりまとめられる、筋を通してしっかりしなければ、野心や野望を持つ、自分で何でもできるなどから自己主張因子と判断した。第3因子はスリムな体形、可愛らしくありたいなど、かわいい体形因子と読みとれる。各因子に高い負荷量を示す項目を比べると、自身が思い描く「女らしさ」とほぼ同じ因子であり、従ってほぼ同じ構造であることがわかる。第1因子は6項目（項目18、30、32、38、45）が同じで、第2因子は自身の像の因子（項目12、19、39）をほぼ含み込む形になっており、また第3因子は3項目中2項目（47、48）が同じだった。

#### 世間が思う「女らしさ」：女性の回答

女性が行動特徴によって思い描く「世間が考える女らしさ」の第1因子は、育児に向いている、アイロンがけが絵になる、デートではリードする（逆転項目）、恋愛はロマンティックに、むだ毛の処理、真心、身だしなみに気を配るなどから、古風な女性因子と判断した。第2因子は、つまらないこともおしゃべりする、異性から身体をジロジロ見られる、ボディラインの服、スカーフで魅力、イヤリングをよくつける、鏡で自分の顔をよく見る、華やかな色や模様の服などの項目からファッションモデルのような華やかな女性因子と考えられる。第3因子はピンク色の服を着ても抵抗なし、スリムな体形、可愛らしくありたいなどからかわいい体形因子と読みとった。第3因子以外の2因子は女性自身が思い描く「女らしさ」の第1因子（おしゃれ因子）、第

2因子（自己点検因子）とはまったく別のものになった。

以上の結果をまとめたものが表2である。この表には実施した20回の因子分析について、おのおの3因子を載せた。本稿では次にまずこれらの因子の説明率について解説する。その後この表に基づいてまず自己像と自身が思い描く「男らしさ・女らしさ」の像（以下「自身の像」と略記）の異同について、続いて自身の像と世間が思い描いていると思う「男らしさ・女らしさ」の像（以下「世間の像」と略記）の異同について整理する。

#### 分析に採用した因子の説明率と男らしさ・女らしさの構造について

表2に載せた因子のうち第3因子はどの場合も初期解における説明率が10%未満だった。因子分析で抽出された因子の中で検討に値すると判断する基準については諸説あるものの、説明率が10%以上ある因子という基準は比較的広く認められた基準の一つと考える。この基準を満たす因子を改めて見てみると、本研究で実施した20回の因子分析のうち16例において、第2因子が10%以上、第3因子が10%未満という結果だった。自己像や「男らしさ・女らしさ」を考える際には、少なくとも2次元で検討すべきことを示していると考えられる。また上に述べてきた具体的な因子の内容からは、男らしさと女らしさが一次元の双極をなすという考え方は、二重に否定されることになった。すなわちまず男らしさも女らしさもそれぞれが少なくとも2次元の広がりを示した。さらに男らしさの構造と女らしさの構造は正負を逆にすれば重なるという単純な関係でもなかった。

他方主たる因子として一つの因子しか示さなかったのは、性格特性によって描く男性の自己像（第2因子の初期解時の説明率8.52%）、

行動特徴によって描く女性の自己像（同9.39%）、行動特徴によって女性が思い描く「男らしさ」像（同9.98%）、行動特徴によって女性が思い描く「世間が思う女らしさ」像（同8.35%）の4例だった。女性が考える「女らしさ」に関しては、1次元の可能性も残る。

#### 自己像と自身の像の異同について

自己像と自身の像は本来概念的に別のものだが、ともに自身が思い描く人の像であり現実には相互に影響しあっていることが想定されることから、具体的にその異同を探ることにした。総じて、自己像と「男らしさ・女らしさ」の自身の像との共通点は少なかった。性格特性で描く自己像で見られたリーダー因子は、男性においても女性においても第2因子、すなわち二番手の位置を占めた。行動特徴による描写においては頼もしさ因子が同じく2番手を占めている。行動特徴項目の中にリーダーを特定できる項目がないため、頼もしさ因子は直ちに性格特性におけるリーダー因子と同じとは言えない。しかしこの二つは対人関係の中で指導的位置に立つ人物像を性格と行動の二つの側面から表現したものと考えて良いと思われる。

このリーダー因子と頼もしさ因子は、「男らしさ」についての自身の像では一つを除いて第1因子だった。一つの例外とは、すなわち性格特性によって女性が思い描く「男らしさ」では第2因子だったことである。「男らしさ」に対する自身の像は、男女とも、性格特性で描写する場合も行動特徴で描写する場合も、リーダー性と頼もしさをほぼ中心としている。また逆に「男らしさ」はリーダー性と頼もしさという形で、男性のみならず女性においても自己像に含まれていた。一方リーダー性と頼もしさは「女らしさ」についての自身の像では男性も女性も、そして描写の観点を

問わず、三番手（性格特性による描写）あるいは四番手以下（行動特徴による描写）だった。

#### 「男らしさ・女らしさ」に対する自身の像と世間の像の異同について

「男らしさ・女らしさ」の一番の特徴として、まずその理想性に注目する。「男らしさ・女らしさ」の具体的な内容として理想の男性像、理想の女性像を思い描くという傾向は、今回の結果の中で「女らしさ」について性格特性で描かれた像に明確に見ることができる。男性も女性も、そして自身の像においても世間の像においても、「女らしさ」の第1因子として小説やドラマに出てくる理想的な女性像を描いていた。まず一つの因子に込められた内容の多さは想起される女性像の現実味を減らし、非現実性を高める。また第3因子ではあるものの男性にも女性にも示された「ダメな男・ダメな女」因子との対比から、先の因子はやはり理想の女性像因子と判断される。

そこに理想像を思い描くという視点は同じく行動特徴によって描く「男らしさ」にも、男性にも女性にも共通して見出された。そこで共通して第1因子となっている「頼もしさ」因子は先の理想の女性因子と同じく、小説やドラマに出てくる理想的な男性像に見える。非現実的という点では、男性が行動特徴によって思い描く「女らしさ」も理想像と言いうる。第1因子の「お嬢様」因子の内容は、男性が自分勝手に思い描く理想の女性像に見える。さらに男性は性格特性によって思い描く「男らしさ」の自身の像についても理想の男性像をあてはめている。

第1因子に注目すると、理想性が認められなかったのは、男性では性格特性によって思い描く「世間の像」のみだった。しかし女性では性格特性によって思い描く「男らしさ」

に対する「自身の像」も「世間の像」も、そして行動特徴によって思い描く「女らしさ」に対する「自身の像」も「世間の像」についても見られた。男性よりも女性の方が現実的な見方をしていることがうかがえる。

#### 「男らしさ・女らしさ」に対する自身の像と世間の像の食い違い：多元的無知の検証

本研究では「男らしさ・女らしさ」に対する自身の像と世間の像の食い違いに、いわゆる多元的無知 (pluralistic ignorance; Prentice & Miller, 1993) を見出すことができた。表2において網掛けを施した6カ所がその部分である。その中で4カ所は重要度の食い違いだった。残る2カ所では自身の像と世間の像が同じとは言えないほど異なっていた。

まず性格特性によって女性が思い描く「男らしさ」において自身の像の第1因子（思いやり）と第2因子（リーダー）が、世間の像では逆になった。内容は同じでも重視する順番が逆になっている。同じ現象は性格特性によって女性が思い描く「女らしさ」においても見られた。第2因子と第3因子の順が自身の像（ダメな女とリーダー）と世間の像（リーダーとダメな女）で逆になった。

同様の逆転は女性だけではなく男性にも見られた。性格特性によって男性が思い描く「男らしさ」において自身の像の第2因子（家庭的）と第3因子（おしゃれ）が、世間の像では逆になった。ここでも内容は同じで、重視する順番が逆になっている。また性格特性によって男性が思い描く「女らしさ」においても自身の像の第2因子（自己主張）と第3因子（リーダー）の順位が世間の像では逆になった。性格特性によって思い描く「女らしさ」については男性も女性も、第1因子では理想を見て、第2因子と第3因子では自身の像と

世間の像の逆転を示した。

多元的無知の上記4例は重視する視点の順位が入れ替わるものだったが、女性ではさらに、自身の像と世間の像で内容が異なったものになる例が見出された。行動特徴によって女性が思い描く「男らしさ」は、第1因子と第3因子については自身の像と世間の像は同じだったが、第2因子は全く異なっていた。自身の像の第2因子は「しっかり」因子（0.5以上の負荷量を示した項目番号（以下同じ）：20, 24, 35, 39）であり、世間の像の第2因子は「甲斐性」因子（12, 21, 25, 40）であった。

自身の像と世間の像の同様の食い違いは、行動特徴によって女性が思い描く「女らしさ」にも見られた。自身の像の第1因子は「おしゃれ」因子（4, 16, 28, 29, 30, 31, 32）であり、世間の像の第1因子は「古風な女性」因子（1, 8, 17, 22, 27, 33, 37）であった。同じく第2因子は「自己点検」因子（9, 10, 27, 28, 41）と「華やかな女性」因子（9, 13, 31, 32, 38, 41, 45）であった。この3例は、特に女性が、「女らしさ」に対する自身の見方と世間の見方が全く異質だと思っていることを示している。

今回の調査に参加した多くの女性が世間の考える「女らしさ」と自らの考える「女らしさ」に違いを感じている。そして、違いを感じているのが「多くの女性」であることはまだ知らされていないという意味において、この状態は、先の重視する視点の逆転とともに明確な多元的無知と言いうる。

少なくともPrentice & Miller (1993, 1996) においては「多元的無知は正すべき」という記述はない。しかしキャンパスの飲酒について多元的無知を見出した1993年の研究において、キャンパスの飲酒抑制は明らかにその趣旨であった。同様の論調は男らしい遊びと女らしい遊びの弁別過程を分析した1996年の研



究においても男女の区別をなくすという方向で見出すことができる。

本稿においても先に見出した多元的無知について、それを正すべきという趣旨を打ち出すことは可能であるが、次の二つの理由から、この現状を静観することにする。一つには Prentice & Miller(1993, 1996)と同じく、潜在的にはともかく、少なくとも表面的には価値中立的な立場を守るためである。二つには以下に述べるように、多元的無知は社会的現実の変化と維持の過程の中に生じた一つの齟齬として、生起と進展の過程を観察することで社会的現実の研究としてより大きな成果を期待できると考えるからである。男性も女性も先に見出されたような自身の像と世間の像の異同をどのように扱ってゆくのか、その有様は他の社会的現実を分析する際に貴重な手がかりとなる。

#### 多元的無知に対するPrentice & Miller(1993, 1996)の検討方向と本研究の視点との異同

先に述べたように多元的無知は社会的現実の変化と維持の過程の中に生じた一つの齟齬と見ることができる。Prentice & Miller(1993, 1996)の分析は、その存在に気付きながらなおそれを維持しようとする心理的機構に焦点を当てている。しかし周界の社会的現実の一つの姿を明らかにしたものの、その分析視点において、社会的現実そのものの研究とは言い難い。

まず「事実との食い違いが明らかなのに、なぜその規範に固執するのか」という問いは「それが正しいと分かっているのに、なぜ周囲の人の意見に同調するのか」という同調研究において用いられたと同じ分析視点である。

加えて「合理的に、あるいは客観的に正しければ、周囲と異なる意見であってもそれを

主張すべきだ」あるいは「主張するのが当然だ」という視点が暗黙の前提になっている。

しかし社会的現実の多くは、合理的基準や客観的基準になじまない。その適否は、個人においては当該時点での日常生活に適合しているかどうかによって判断され、否とする人の増加にともなって修正(改革派)とその対抗としての保護(守旧派)の動きが生じることになる。この視点は、日常生活における適否の否を肯定的にとらえる現象の研究である流行や普及過程の研究にすでに見られるものである。

またもし多元的無知に気付かなければ「自分はともかく」という思いは、良くも悪くも、自分はユニークだという思いになる。それがよいとされることなら「私は特別なのだ」と自信や誇りのもとになる。よくないとされることなら「私は変なのだ」と落ち込むことになる。さらにこの「自分はともかく」という自覚もなければ、その事象は立派な社会的現実と言いうる。すなわちPrentice & Miller(1993, 1996)の分析は、当該事象に対して我々が「無知を自覚していること」を出発点としており、社会的現実の存在を明らかに示したものの、そのものの研究とは言い難い。

社会的現実は、むしろ当初は一致していた合意の内容と現実が、時とともに解離して行くのが現実的な様態である可能性が高い。従っていつどのようにその解離に気付きはじめるのか、そしてその時の反応が主たるテーマと考える。気付きはじめる段階を二つに分けるならば、自らのユニークさを自覚する段階がまず生じ、続いて同様のユニークさを感じている多くの他者の存在に気付くことでようやく「多元的無知」として認知されることになる。その先にPrentice & Miller(1993, 1996)の視点が位置することになるが、その分析視

点は正誤、虚実ではなく、日常における適否を背景とした守旧派と改革派の集団間の力学に注がれるべきであろう。

### 引用文献

Best, J. (2006) *Flavor of the month: Why smart people fall for fads*. Berkeley: University of California Press. (邦訳 林大訳 「なぜ賢い人も流行にはまるのか：ファッドの社会心理学」 2008, 白揚社)

福富 護 (1985) 「『らしさ』の心理学」 講談社新書 講談社

Garfinkel, H. (1963) A conception of, and experiments with, "trust" as a condition of stable concerted actions. In O. J. Harvey (Ed.) *Motivation and Social Interaction: Cognitive Determinants* (pp. 187-238), Ronald Press, New York .

石井 徹(1996) Garfinkel(1963)の社会心理学的概説 島根大学法文学部紀要 社会システム学科編 1, 15-36. (Ishii, T.)

石井 徹(2005) 常識の規範的影響について 社会心理学研究, 20(3), 224-252. (Ishii, T.)

石井 徹(2007) 社会的現実における「変」という感覚の効用：無意識と意識, 集合と個人の接点として 島根大学法文学部紀要 社会文化論集 4, pp.1-15.(Ishii, T.)

小出 寧(1999) ジェンダー・パーソナリティ・スケールの作成 実験社会心理学研究, 39, 1, 41-52.

Prentice, D. A. & Miller, D. T. (1993) Pluralistic ignorance and alcohol use on campus: Some consequences of misperceiving the social norm. *Journal of Personality and Social Psychology*. 64(2), 243-256.

Prentice, D. A. & Miller, D. T. (1996) Pluralistic ignorance and the perpetuation of social norms

by unwitting actors. In Zanna, Mark P. (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 28. (pp. 161-209). x, 468 pp. San Diego, CA, US: Academic Press.

牛窪 恵(2008) 「草食系男子『お嬢マン』が日本を変える」 講談社新書 講談社